8/8 マタイの福音書７章１－５節「まず自分の目から」

小池 宏明 牧師

今日は、７章の初め「さばいてはならい」という教えから、主の言葉を聴く。

＊さばいてはならない

７章１、２節の「さばく」という言葉は、「批評する」とか「罪に定める」「あら捜しをする」などとも訳せる。

私たちは、無意識の内に、他人（ひと）をさばいている場合がある。特に身近にいる家族の中でさばき合うことが多いかもしれない。よくも知りもしないで、知ったかぶって分かったようなことを言うことがある。口に出して言わなくても、心の中で、思ってしまうこともある。教会の中でも、キリストにある兄弟姉妹の間柄であっても、知らず知らずの内に、他人をさばいてしまうことがあるかもしれない。私たちはどうしても、自分に関りのある人の言葉や行動が気になるものだ。

＊他人をさばく原因

私たちが、他人のあら捜しをしたり、批評したり、そういう思いが出て来てしまうのは、自分が善悪の判断基準になっているからだ。創世記３章で、アダムとエバが蛇に唆（そそのか）されて、神様の言葉に従わずに、「善悪の知識の木」から食べたことは、神様が成す善悪の判断を人間が（食べた）奪い取ったことを意味する。「人間が神のようになってしまった！」これが、高慢にも神様のように、他人をさばき、批評する根本的な原因なのだ。

＊さばく心から解放

主イエス様は明言している。7 章３－５節。どうしたら、自分の目を塞いでいる梁（屋根を支える太い横木）を取り去ることができるだろうか？救い主イエス・キリストが太い木の十字架に掛かって、私の目の中の梁を取り除いて下さるのだ。こうして、私たちは兄弟姉妹を、隣り人を、正しく見る目を回復させていただく。もし、他人のために役立つことをしたいと願うならば、主イエス・キリストの許に行く必要がある。他人(ひと)をさばいて殺す目ではなくて、他人(ひと)を愛して生かす目に変えられる必要がある。ただへりくだって、私たちは、自らの心の貧しさを認めて、救い主イエス・キリストに助けを求めよう。主を求める者に、主はまことに憐れみ深く触れて下さるのだ。太い木が入っていて塞がれている私たちを解放することができる。

正しくさばくことのできるお方は、主なる神様ただお一人。しかし、どうしても、他人を正さなければならない時には、見下したりする思いから離れて、柔和な心を持って正すことができるなら幸いだ。互いに愛を持って仕え合うことができるように歩みたい。